

ずいそう



身だしなみ持論

中野一孝

先日、当社で入社2~3年次若手機電社員の研修会を催しました。その訓示を要請されたので出かけて行きました。会場に入り話をしようとしたところ、目の前に座っている社員が、服装がだらしないうえに長髪、茶髪ときたものです。

啞然として訓示の内容を忘れかけましたが、気を取り直して話を始めました。

「長髪、茶髪がいけないとは言わないが皆は将来、会社、現場をリードする立場になり、多くの部下や協力会社を使っていかなければならない。その時、身だしなみがだらしなかったり、態度がいいかげんだったら、部下や協力会社の人たちはこの人の指示を真に受けて大丈夫だろうかと疑問に思うだろう。そうなればチームワークはとれないし、仕事が上手くいくわけは無い。客先の評価も良いわけは無い。例え現場で泥まみれ、汗まみれで仕事をしていても、常に身だしなみに気を配ることも我々の仕事の一部である。技術屋を自称する我々は、ややもすると技術が中心となり、身だしなみに気配りを忘れがちとなるが、けっしておろそかにすべき事とは思わない。建設業も客商売の一つで、お客あつての商売である。事務所が雑然とし、整理整頓が行き届かず、社員がだらしく働いている会社にお客も仕事を任せる気にはならないだろう。身だしなみのだらしない社員のいる会社より、社員が身綺麗にして働いている会社の方に仕事を頼みたくなるのは当然のことである。客先の評価の一つに社員の見映えも入っているということを忘れてはならない」という内容の話をしました。

これには伏線がありまして、私は現職の前に機械技術センターの所長を勤めておりました。機械技術センターの役割の一つに現場の要求に合った機械の提供があります。ただ、機械を整備して現場に出すだけでなく、機械の使用計画や施工計画をも合わせて提供しますので、現場は我々にとってお得意様です。社内ですから「お得意様」と言う表現は適切では無いのかもしれませんが、気持ちのうえではそのようにすべきと思い、所員を指導してきました。

電話での対応、来客への対応、守衛の対応等々は勿論のこと、事務所の玄関はいつもきれいにして、いつでもお客様を気持ちよく迎える気配りを、所員の誰もが自然に出来るようになれば、外部の評価も高まり、期待以上の仕事ができる、と言った持論で仕事を進めてきましたので、身だしなみについては今でも特段の思いを持っています。

しばらくしてから今度は、中堅社員（6～7年）の研修会で訓示をする機会がありましたので、今回も得意の「身だしなみ」持論でかましてやろうと意気込んで行きました。研修会場に入り訓示を始めようとして会場を見渡したところ、全員が制服の作業着をキチンと着こなしておりますし、無論、長髪、茶髪の社員は見当たりません。見るからに現場マンといういでたちでありました。その中に4～5名、私がセンター所長の時在籍し、私の長髪持論を聞かされ、再三「なんだその髪は」と注意した社員もおりました。数年ぶりに会った者もいましたが、皆見違えるほどに成長しているのには驚きました。懇親会の席で久しぶりに顔を会わせると「部長！髪はチャント切っていますよ」と言って話し掛けてくれました。私の持論がじわりと浸透してきていると感激しつつ、いろいろと昔話に話がはずみました。このこともあってか酒がよけいに美味しく、少々度が過ぎ、講師の連中と帰りにさらにもう一軒立寄ってしまうほどでした。

センターにいる時に口うるさく「挨拶をしろ」、「髪を短くしろ」、「だらしくするな」と言っていた連中がいつの間にか立派な社会人となり現場マンに成長していたのです。

訓示が小言となった研修会の若い連中も次第に社会にもまれ成長して行くものと思っています。

よく我々は「技術の伝承」と言う言葉を使いますし、耳にもします。将来に向けて現在の技術を受け継ぐ者がいないと嘆くことしきりですが、忘れてならないことの一つに、先人から受け継いでいる日本人としての礼節があるのではないのでしょうか。

現場においては、先輩諸氏から現場における技術もさることながら、社会における礼儀を自然に教えられていたのだと思います。

建設業も客商売の一つと言いましたが、われわれの仕事は客先のニーズに合った製品を納めることです。例え現場の技術屋といってもいろいろの形でお客様やその関係者に常に接するわけですから、相応の対応が出来る素養を身につけていなければなりません。

「技術の伝承」と同様に「礼儀、礼節」も我々が後輩に受け渡す大切な役割の一つではないのでしょうか。

この連中がと思っていた若者がいつしか立派な社会人、現場マンとして成長し、会社の中核社員となっているのを身近に見て、若手社員の研修会の時に心配したことが取り越し苦労に終わるだろうと安心しました。

口うるさく言っていたことや現場での生活を通して彼らは先輩を見て自然な形で受け継いでいたということでしょう。「先人を見て育つ」の喩えどおり、我々は常に後輩から見られているので、自分自身が身を正さなければならないと改めて思いました。

なんだか年寄りじみた文章表現になってきましたが、なんとといっても若いということは本当にすばらしいことです。若者にうらやましさを感じるとともに、しみじみ年を重ねたなあと思うこの頃です。